

守

対談

破

創

# 文化や芸術は政治も国境も超える。だからこそ 海外の名作にもオリジナルにもこだわる

劇団四季では『昭和の歴史三部作』で、戦争の悲劇を繰り返さないために語り継ぐべき史実を描き出している。ミュージカルは単なるエンターテインメントではないのである。文化や芸術に何ができるのか？ ミュージカルが大好きで、家族が「四季の会」会員でもある須田審議委員に、浅利慶太氏と芸術の持つ今日的意味について話し合ってもらった。

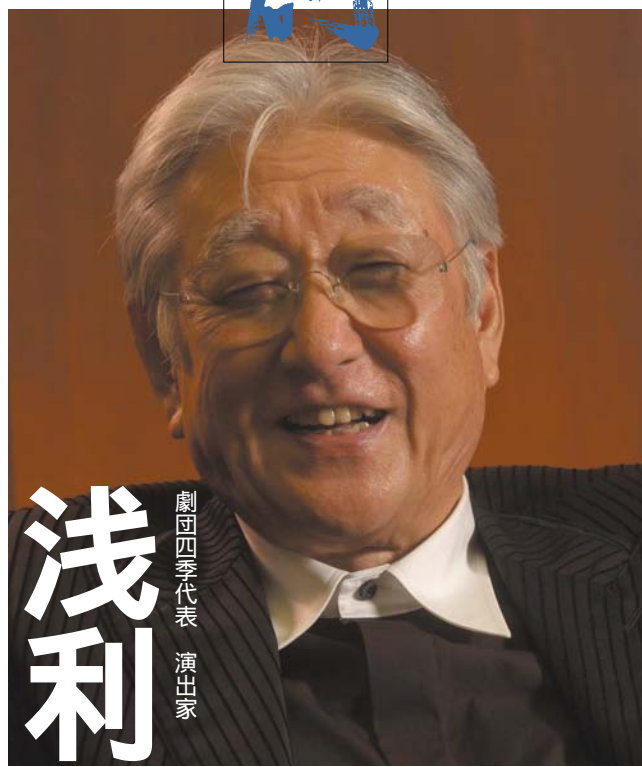


須田美矢子

Miyako Suda

日本銀行政策委員会審議委員

[すだ・みやこ] 1948年山口県生まれ。1971年東京大学教養学部卒業。1979年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。1982年専修大学経済学部助教授。1988年専修大学経済学部教授。1990年学習院大学経済学部教授。2001年より日本銀行政策委員会審議委員。



浅利慶太

Keita Asari

劇団四季代表 演出家

[あさり・けいた] 1953年慶應義塾大学在学中に、劇団四季を結成。劇団四季演劇作品の演出、制作を手がけ、さらに海外企画を数多く招聘プロデュース。ミラノスカラ座、ザルツブルク音楽祭など、海外でのオペラ多数を演出。またイギリス、中国等への海外公演も手がけている。芸術選奨文部大臣賞、アッピアーティ賞、シェイクスピア演劇賞等多数受賞。

演劇は人生の感動を謳う芸術です

須田 浅利先生は、舞台づくりはもちろん経営にも携わられておられますし、劇団員だけでなく幅広く舞台人を育てることに力を注いでおられます。また、文化外交にも熱心です。最初に、日本の舞台芸術の現状分析からお聞きしたいのですが。

浅利 音楽や絵画と違って、演劇は観客を前にしなければ成立しない芸術です。そして観客は、入場料に見合ったのおもしろさや感動がなければ劇場に来てくれません。日本の演劇界には、まだまだ「独りよがり」で良いとする傾向が無くなっていないと思います。その時代の観客と、人生の感動や生きることの素晴らしさを謳い上げる舞台を造り出す。大変難しい仕事ですが、これは舞台芸術にとって最も大切なことだと思えます。私自身も、五十数年の経験で、ようやくそこに少し手が届いてきたかなという思いです。

須田 私が初めて劇団四季の舞台を見たのは約一〇年前ですが、「ああ、素晴らしい」とストレートに感じ、それを機会にはまってしまいました。ニッセイの名作劇場で、劇団四季はファミリーミュージカルを行われ、小学生にもたくさん舞台を見せ

ておられますね。私も娘とこれまで何度も見せていただきましたが、たった二時間に、メッセージや感動が凝縮されており、とても素晴らしいと思いました。

**浅利** 全国の小学校六年生が無料でミュージカルを観劇する「ニッセイ名作劇場」は本当の意味で「メセナ」で、既に四十余年にわたって続けられ、その観劇児童総数も六二〇万人に上ります。そこでは、親子の愛情の大切さとか、友情や自己犠牲の尊さ、生命の尊重など、今の教育ではストレートに扱わないテーマが主題として選ばれています。

演劇は同化の芸術です。客席と舞台は同化しながら感動を共有します。子供たちは皆、舞台の主人公に乗り移って劇の世界を生き、人生に不可欠で最も重要なテーマを、自らの心で学んでいくのです。

**須田** 『オペラ座の怪人』の映画を見て、やはり舞台の方が良いと感じました。それはなぜかという答えが今おっしゃった同化なんですね。ファミリーミュージカルでは一緒に歌を歌いますが、あれがすごく楽しいです。しかも、歌がすごく覚えやすいですね。

この夏に昭和の歴史三部作を発表されました。『李香蘭』『異国の丘』

『南十字星』と続きますが、戦争を伝えようとされているため、普通の舞台と違い、重たいとどついても感じています。この「三部作」についての先生の思いをぜひお聞かせ下さい。

**浅利** 私は「昭和」を生きた世代です。私から、戦争の記憶は実体験として脳裏に焼きついていきます。ところが稽古場で若い俳優と話していると、今の若い世代が、この時代の出来事や昭和の戦争について何も知らないことを痛感します。これは非常に危険です。戦争が正しいか否かに関りなく、その「絶望的な悲惨さ」を語り継ぐ必要があると思います。「昭和の歴史三部作」を作る決心をしました。

戦争には、民族が集団で狂を発するという側面があります。日本人には、互いに協力し合うことで個人以上の力を発揮する「集団性」ともいふべき長所がありますが、これが間違った方向に向かつとんでもないことになる、というのが前世紀の教訓です。またあの戦争の本当の責任の所在を曖昧にする、悪い意味での官僚的傾向も続いている。戦後六〇年経ちましたが、日本人の特徴は何も変わっていません。だからこそ、あの戦争の実相を描き、その愚かさをよく知らなければならぬ。三作

を一挙に上演することで、若い世代がこの時代に興味を持つきっかけになれば良いと思っています。

**須田** 日本では学校教育で戦争について議論することが十分に行われていません。戦争についてよく知らない若い人たちが戦争に向き合い、感じ取り、戦争について考えるきっかけになるという意味で、すごく教育のことを考えられている作品であると感じます。

## 「チケットは金券ではなく「空席情報」という発見

**須田** 演出に専念するとお金に無頓着になりがちですが、経営も同時にされているということが大きな意味を持っているのではないかと思います。経営面では、専用劇場を低コストでつくられたという話も伺っています。しかも劇場に工夫が凝らされていますね。この間、『キャッツ』をジェリクル・ギャラリーから見せていただきましたが、そこから見るのもおもしろいと感じました。

**浅利** 全ての企業には抽象化できる理念があると思います。例えば電機メーカーは「便利」、保険会社は「安心」を商品にしています。劇団四季の場合は「感動」を商売しています。先ほども申し上げましたが、

お客様からお代金を頂いている以上、「独りよがり」でない、対価に見合う商品を提供しなくてはならない。『キャッツ』のために専用劇場を作る際も、低コストに抑えてお客様に負担をかけないこと、作品を更に感動的にご覧いただけることが両立できるよう、細心の注意を払いました。

**須田** 私には劇団四季の切符を取るのとは大変だという意識があります。ところが先日テレビで営業部隊が客に努力されているのを見て、そのギャップをすごく感じました。

**浅利** 人気のある作品を可能な限りロングランし、学校や企業のお客様に観劇の魅力を知っていただくためには、全国を限なくネットワークする必要があります。それを約一五〇名の営業部隊が担っているわけです。また現在では当たり前になっているコンピューターオンラインのチケット販売システムを、最初に手掛けたのは我々です。『キャッツ』を東京で初演した二年前の事でした。チケットを「金券」ではなく「空席情報」だと考えれば、コンピューターで扱えますし、全国どこでも同じ条件で販売が出来ます。そこでチケット販売に意欲を持っていた情報誌「ぴあ」と提携して、現在の

システムの基礎となる、初めてのオンライン販売網を作り上げました。

数年前には、インターネットでの直接販売も開始しました。これにはお客様がお好みの席を一つずつ選ぶ事が出来るという新しいシステムを取り入れ、今では全販売量のうちの五〇%がネットを経由するまでに成長しました。

全国のネットワークを重視する背景には、「文化の東京一極集中の排除」という、劇団四季が長く大切にしてきた理念があります。どんな苦勞を伴っても、全国のお客様と感動を分かち合いたい。約二八〇もの都市を対象に全国公演を行っているのはそのためです。〇四年はファミリーミュージカル『桃次郎の冒険』を北海道の離島、利尻島、礼文島でも公演しましたし、〇五年は『魔法をすてたマジヨリン』を沖縄県の石垣島、宮古島でも上演しました。

**須田** 日本人の文化に対する態度も変わってきたのかもしれませんがね。

**浅利** 『キャッツ』の上演を決意したときです。ロンドン、ニューヨークでは常識になっている無期限ロングランがなぜ東京でできないのか。経済力もあり、知的水準も高く、好奇心も強い。能、歌舞伎、文楽、狂言など演劇文化の伝統も持ってい

る。日本の観客や市民社会を信じてプロジェクトを始めましたが、結果的には一年間のロングランが実現できました。

また舞台のレベルにも、欧米に並ぶ高い水準が求められます。『キャッツ』初演の年には、専用劇場と同時に横浜あざみ野に稽古場を建設し、俳優たちがレベルアップ出来る環境を作りました。現在もこの考えは変わっていません。〇六年には現在の三倍の規模の新稽古場も誕生します。投資は大きいですが、これも優れた舞台は充分な稽古から生まれないという信念からです。有名なテレビタレントに高額な出演料を払って招聘しても、観客は感動を味わってはくれません。観客はスターではなく作品を見るのです。

また、舞台の成功の八割は台本が握っています。台本がよければ感動が生まれます。演出や俳優、装置などは、残りの二割なのです。いい台本を、その感動を表現できる能力のある俳優で上演する。そうすれば、観客の支持は得られます。

**須田** そのとおりだと思います。その一方で、リピーターの私としては例えば、きょうの『オペラ座の怪人』のクリスティーヌ役やファントム役は、「誰かな」とか、「私のイメージ

にあっている人かな」とワクワクしながら劇場に足を運びますし、帰りには、「他の俳優さんと比べてどうだった」といった具合に、ある部分では演ずる人という面についても意識してしまいます。

そういう意味でも、俳優さんを育てるということも大切であり、それが新稽古場の建設等につながっているのです。

## 文化は政治を超える だから海外物五〇%に こだわります

**須田** 私はアンドリュー・ロイド・ウェバーのミュージカルが大変好きで、ロンドンでもたくさん見ましたが、最近ではなかなか上演されなくなっています。もっとも、今年は劇団四季でいくつも上演されましたので、何度も足を運びました。『エビータ』、『キャッツ』、『オペラ座の怪人』、『アスペクツ・オブ・ラブ』と……。海外の作品やオリジナルの作品を、どういった視点で取り入れておられるのでしょうか。

**浅利** 「昭和の歴史三部作」や『夢から醒めた夢』など私どもの手で作るオリジナルにも力を入れています。それでも五〇%は海外の良質なミュージカルを上演したいと考えて

います。今から三〇年前は、欧米のミュージカル先進国に比べて作品創作の実力差があり過ぎましたが、四季の創作力はもうほとんど同レベルです。欧米からも、四季のオリジナル作品を上演したいという打診を受けるまでになりました。それでも海外のものを上演したいのは、ブロードウェイやウエストエンドでは、本当に選び抜かれた作品だけが残っているからです。世界的にヒットするのは、恐らく二〇作品の中の一作程度でしょう。若い頃、作家の丸谷才一さんに「外国の作品より、日本の創作劇を中心に上演したい」と申し上げたら、「シェイクスピアはイギリスの作家ではなく、世界の作家だ。世界の名作に国籍はないんだ」と一喝されました。今でも全くその通りだと思います。

文化は必ず政治を超えます。

外交官の演説よりも、『ウエストサイド物語』が日本人に教えたアメリカの素晴らしさの方が、強く、深く心に残る。ガーシュウインの名曲やサッチモの歌、『コーラスライン』や『クレイジー・フォー・ユー』の舞台、ハリウッドの映画もそうでしょう。もし、こうした文化を戦前の日本人が充分に享受していたら、はたしてアメリカと戦争をしたでしょう。





うか。文化の力は必ず政治を超え、国境を超えて呼応し合うものです。だから閉鎖的に、国粹主義になっただけではない。

**須田** 今度、『鹿鳴館』をされますよね。

**浅利** 三島由紀夫さんの代表作です。生前、親しくさせていただいたのに、彼の作品を劇団四季が手掛けたことはなかったのです。三島さんが戯曲を書かれる際には、何度かお手伝いをした事もあります。名作『サド侯爵夫人』の、最初の読者も私なのです。『鹿鳴館』はいろいろな劇団が手掛けている名戯曲ですが、劇団四季ならではの、三島文学が香り立つような舞台を作りたいと思います。

## 四季育ちの俳優が 中国・韓国の 主流になる日は近い

**須田** 今後やろうとされているものは、ほかにどんなことがあるのでしょうか。

**浅利** 魅力あるオリジナル作品の創作や、全国各地の公演を充実させることはこれからも継続して行きたいと考えています。しかし最も力を入れたいのは、中国、韓国演劇界への支援です。欧米の最新ミュージカルを高いレベルで上演する技術やテクニックは、日本の方が少し早く手に入れました。また中国、韓国にも才能ある俳優が数多くいるのに、残念ながら、母国では仕事をする場所や機会が少ない。劇団四季には、中国、韓国出身俳優がそれぞれ三〇名、合わせて六〇名所属しています。彼らに母国で、母国語で演じる機会を作つてあげたい。北京やソウルで大型の作品を上演し、俳優だけでなく技術者、経営スタッフを育て、継続した仕事が出来る環境の実現に向けて努力を続けたいと考えています。

**須田** 今回の韓流ブームが日本と韓国に良い影響を与えました。一般大衆の目線でお互いが理解し合うためには、文化というのはすごく大事な

気がします。

**浅利** 四季で活躍している中国、韓国の俳優たちは、誰一人として反日感情を持っていません。何十年か後に、四季出身の俳優は両国のミュージカル界を支える中心メンバーになるでしょう。中国、韓国の演劇界が日本に親しい気持ちを抱いたりリーダーたちに率いられる事は、とても大きな意味があると思います。

**須田** 私は金融教育に関心を持っており、最近小学生にまで直接語りかけています。教育の効果は、私が直接子供たちを教えるのも良いのですが、自分ができることは限られていますので子供たちを育てる先生にきちつと教えることができればもっとと広がりを持つと思います。そういう意味でも劇団四季出身者の今後の活躍に期待したいですね。

**浅利** 中国演劇界との交流は、俳優の留学だけに止まりません。国立の演劇大学である中央戯劇学院がミュージカル科を開設する際には、教師を派遣するなど随分とお手伝いをしました。現在でも四季で学んだ俳優が教師を務め、入学試験にスタッフを派遣するなどの深い連携があります。また四季の初めての海外公演は一九八八年に北京で上演した『ハンズ・アンデルセン』でした。その後

も『ミュージカル李香蘭』を舞台となった中国東北部で公演し、ディズニーマウの『美女と野獣』を中国語、中国人キャストでロングランするなど、積極的な交流が続いています。

**須田** 日中関係は、経済はともかく政治の対話がなかなか進まない状況ですから、ぜひそういう交流を続けたいと思います。ニッセイの名作劇場のように、企業とタイアップし、現地の人を使つての楽しいファミリーミュージカルをもっと少し広げるといふのは大変なんでしょうか。子供のときに初めて見たミュージカルが劇団四季のものだったという人は結構大勢いると思います。

**浅利** 今年は何度も北京、ソウルに出張し、現地の新聞社や放送局、政府関係者と打ち合わせを行ってきました。また中国の劇団からは、四季のオリジナルミュージカルや、ファミリーミュージカルを自分たちで上演したいという希望もいただいているので、これにも応えてあげたい。四季が中国、韓国で本格的な仕事を始動させるのも、もう目前に迫っています。

**須田** 演劇界の現状から国際文化交流まで、本日は貴重なお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございます。